平安時代における「静態動詞」の意味用法の一形式

―「似る」と「すぐる」の用例を中心に―

森脇茂秀

一、はじめに

以前、稿者は、森脇（二〇〇四）で、平安初・中期の仮名文学作品に用いられた「似る」の用例を考察した結果、次のような結論を得た。

「似る」は、否定語と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「ゴトシ」というよりも、漢文訓読語「シク」（「シカズ」等）に近似の性質を有する、と考えられるのではないかと思われる。

また、「に似たり」形は、「漢文訓読語」である、との指摘があるが、「に」と「似たり」との間に、「ぞ」「こそ」等の係助詞が介在したり、「いとよく」等の修飾語が介在しており、漢文訓読にみられた「形式用言」としての「に似たり」形ではなく、仮名文に用いられた「に似たり」形は、状態性を有した「実質動詞」である、と考えられる。

現代語の「似る」は、「ている」「た」といった承接する所謂助動詞等が限られているが、そのような「承接」については、言及が不十分であり、また、『源氏物語』中の「似る」の用例については詳述しなかった。

そこで、森脇（二〇〇七）で『源氏物語』に表れた「似る」の用法を考察し、次のような結論を得た。

・「にぞ」「には」「にも」「にこそ」「いとよく」「げに」等、「に」と「似る」との間に介在し、「似る」は本動詞用法として捉えられる。

・否定辞と共起しない「似る」肯定形は、「り・たり」

と共起する。例外は「似て」形であるが、極めて少数である。

・「り・たり」と共起しない「A、Bに似る＋否定辞」の用例においては、概して、Aは、具体的な事柄や抽象的な事柄があり、Bには「一般性」や「標準的」といった性質が認められる。

・否定辞と共起する「似る」否定形は、形式名詞「もの」や「べし」が介在する用法があり、この用法は漢文訓読語「シク」と共通性がある

本稿では、現代語で「ている」形と共に共起し、しかも「似る」（百三十二例）とほぼ同数の用例数である動詞「すぐる」（百二十五例）を比較対照しながら、平安時代における静態動詞「すぐる」の意味用法の一形式について、考察してみようと思う。

二、源氏物語中の「似る」

静態動詞「似る」の用例の分布については、森脇（二〇〇四）で既に示した。

・平安時代初・中期の仮名文に見られる「似る」の用法を考察した。その結果、「似る」は、否定語と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「ゴトシ」というよりも、漢文訓読語「シク」（「シカズ」等）に近似の性質を有する、と考えられるのではないかと思われる。

・いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、（女）「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたざまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。　（「源氏物語」花宴（一）４２６頁）

この用例について、小学館『日本古典文学全集』「頭注」に「「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき」（大江千里集、新古今・春上　大江千里）に

よる。「しく」は漢文訓読語なので、女にふさわしく「似る」と言いかえたとも、当時すでに「似る」と伝承されていたともいわれる。この歌によって、この女を朧月夜と称する。」と指摘する記述があるが、「似る」の語性を考えたときに、重要な指摘であると考えられる。

また、「に似たり」形は、「漢文訓読語」である、との指摘があるが、「に」と「似たり」との間に「ぞ」「こそ」等の係助詞が介在したり、「いとよく」等の修飾語が介在しており、漢文訓読にみられた「形式用言」としての「に似たり」形ではなく、仮名文に用いられた「に似たり」形は、状態性を有した「実質動詞」である、と考えられる。

また、「承接」に関しては、助動詞「り」「たり」との関係から、既に近藤明（一九八四）に極めて重要な指摘がある。

右の条件に該当する「合ふ」以下（「似る」を含めて（稿者注））十二の動詞は、かなり高い比率で「り」「たり」を伴うが、更に表七に示した「動詞＋否定辞」「動詞……否定辞」「中止・接続法」を加えたものは、それぞれの動詞の用例の八～九割前後からそれ以上に達している。（略）

〔動詞＋否定辞〕

⑬かやうの物さへも、なべての人にも似させ給はぬや（狭衣　巻一　一〇五⑯）

の如く、「り」「たり」を介さずに直接、または他の助動詞・補助動詞を介して否定辞を下接するものである。⑬の例の動詞「似る」は、現代語では、

（略）「Bニ似る」の使用例はそう多くない。（森田良行『基礎日本語』角川書店昭52）

という指摘が、否定辞を伴う場合にも当てはまるものと思われる。即ち、「この子は私なんかに似ないほうがいい。」の如く、静的な状態の否定ではなく、状態の変化の否定を表す場合を除くと、「似ていない」「似ていらっしゃらない」等、「ている」を介して否定辞を下接する形が一般的である。「似る」において、現代語の「ている」に相当するものが古代語では「り」「たり」であろうことは、表七から伺える「似る」と「り」「たり」との緊

密な関係からも明らかである。しかし、「似る」に直接、又は他の助動詞・補助動詞を介して「り」「たり」が接続したもの（以下「似る＋り・たり」）に更に否定辞が下接した例は、表七では皆無である。「似たらず」や「似給へらず」等は見られない訳である。言わば、「似る」においては、「動詞＋り・たり＋否定辞」の出現が予想される場合では、実際には、「似る＋否定辞」が使用されていることになる。

この他に、否定辞を下接する際、「動詞＋り・たり＋否定辞」の形を全く用いず、専ら「動詞＋否定辞」が使用される動詞としては、表七に掲げた中では「あふ」「向ふ」がある。これらの動詞も、「似る」同様「り」「たり」を伴うことが多く、しかもこれらの動詞が「動詞＋否定辞」に用いられた例の多くは、現代語訳する際には「動詞＋ていない」の形をとることが可能と思われるものである。即ち、これらの動詞においても、「動詞＋り・たり＋否定辞」が予想される場合で、実際には専ら「動詞＋否定辞」が使用されている訳である（傍線稿者）。

以下、「源氏物語」中の「似る」全133例の用法を纏めて示すと次のようになる。

【「似る」と「否定辞」とが共起するもの】90例（67％）
〔似る＋否定辞〕（「似る」と「否定辞」とが直接承接する用法）51例（38％）
〔似る……否定辞〕39例（29％）（「似る」と「否定辞」とが直接承接しない用法
（内〔似る（連体形）＋名詞＋否定辞〕18例）14％
（〔似る＋べし＋否定辞〕5例（〔似る＋べし＋反語（「やは」）〕2例）

【「似る」と「り・たり」とが共起するもの】42例（32％）
〔似る＋たり〕25例（19％）（「似る」と「たり」とが直接承接する用法）
（内〔似る＋たり……否定辞（「なし」）〕4例）
〔似る……り・たり〕17例（13％）（「似る」と「たり」とが直接承接しない用法
（内〔似る……り・たり……否定辞（「ず」）〕3例

【「似て」4例（3％）

【「似る」と「否定辞」とが共起するもの】90例（67％）は、近藤明（一九八四）で示された、「「動詞＋り・たり＋否定辞」が予想される場合で、実際には専ら「動詞＋否定辞」が使用されている」とされた用法である。また、直接承接してはいないが、「「似る」＋り・たり＋否定辞」形は3例用例がある。

三、「すぐる」

現代語の「すぐれる」は、「すぐれている」と「ている」と共起する用法と、「た」を伴い「すぐれた」として出現し、「能力・容姿・価値などが他よりまさる」意を表す。また「気分がすぐれない」「天候がすぐれない」などのように、否定語と共起し良くない状態を表す用法があり、この場合の「すぐれる」は、「よい状態である」という意であると考えることができよう。

［用例1］いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

（桐壺　一　93頁）

［用例1］は、源氏物語桐壺の冒頭部分としてあまりにも有名であるが、ここでは「・・・に・・・すぐれて」という形式で、「すぐる」は「り・たり」と共起しておらず、連用形「すぐれて」となっている。この場面は、『全集』では「目だって帝のご寵愛をこうむっていらっしゃる方があった」、『新大系』でも「目立って寵愛をうけておられる」と解釈されている。

時代は下るが、『大蔵虎明本狂言集』中の「すぐる」は、次のように連用形しか出現しない。

虎明本　8例　すぐれ（用）のみ
すぐれたり3、すぐれた1
すぐれてござる2、すぐれて候1
すぐれ1

『大蔵虎明本狂言集』では、このように連用形「すぐれ」のみしか見られず、固定化された用法であると考えられ

るが、『日葡辞書』（584頁）中での「すぐる」は、「すぐるる」という見出し語も採録されており、用例には「すぐれた」と「た」と共起した用法を示している。

Sugure,uru,eta.スグレ、ルル、レタ（勝れ、るる、れた）優秀である、または、他に超えすぐれる ¶（これは余の馬よりも勝れた（sugureta）または、余に勝れた馬ぢや）この馬はすべての馬の中で一番良い馬である。

†Sugurebito.スグレビト（勝れ人）著名な人、または、卓越した人。

Sugurete.スグレテ（勝れて）卓越して、あるいは、一段と秀でて。

ここで「すぐる」の「用例数」を纏めて表にすると、次のようになる（〈表I〉）。

以下、中古の「すぐる」の用例をあげ、コメントする。

［用例2］ 佐我先設 （我が先に設けしより佐レタリ）
佐 スクレタリ
（日本霊異記 中（国会図書館本訓釈） 218頁 3）

［用例3］ 異秀厭土者也 （土（くに）を厭ふに異に秀レニタル者なり。）
秀 勝也須久礼尓多留
又云備伊弖尓多流
（日本霊異記 中（国会図書館本訓釈） 178頁 5）

［用例4］ 一切の聲の中に最も為上（れ）たること（勝也）、大きに梵（ナ）り響（ヒヾ）キ震（フル）フ雷と音との如し。
（西大寺本金光明最勝王経 平安初期点 七九11）

［用例5］ （略）皆堅固に不可思議なること得つルをモチテ、上の（別訓 スクレタル）願満足しヌ。
（西大寺本金光明最勝王経 平安初期点 九四22）

［用例6］ 魁 勝也大也 須久礼太利
（新撰字鏡（898～901？） 巻九 17オ）

［用例7］ 駿馬 （略）須久礼太留宇萬
（和名抄（931年・938年） 巻十一表5）

〈表Ⅰ〉

作品名	成立年代	用例数	備考
万葉集	(759)	0	
日本霊異記	(822 ？)	2	すぐれたり１・すぐれにたる１
東大寺諷誦文稿	(830 ？)	0	
竹取物語	(859 ？)	0	
古今和歌集	(905)	0	仮名序１（すぐれたる人）
延喜式祝詞	(905-927)	0	
伊勢物語	(900 ？)	0	
土左日記	(935)	0	
後撰和歌集	(951)	0	
大和物語	(956)	0	
蜻蛉日記	(974)	1	すぐれ給へり
三宝絵詞	(984)	28	
落窪物語	(988)	2	すぐれて
枕草子	(1002)	3	すぐれて1、すぐれてあらじ1、すぐれ1
和泉式部日記	(1004)	1	
源氏物語	(1008)	125	
紫式部日記	(1008)	6	
堤中納言物語	(1005)	0	
夜半の寝覚	?	51	
更級日記	(1060)	1	
大鏡	(1086)	20	
法華百座聞書抄	(1110)	4	
古本説話集	(1126 ～ 1201)	4	
佛教説話集	(1140)	4	
詞歌和歌集	(1151)	0	
梁塵秘抄	(1169)	12	
三教指帰注	院政後期	5	
宝物集	(1178)	2	
千載和歌集	(1188)	0	
宇治拾遺物語	(1210頃)	12	
方丈記	(1212)	1	
保元物語	(1221)	7	
平治物語	(1221?)	2	
宝物集	(鎌倉初期)	10	
徒然草	(1330頃)	10	
天正狂言本	(1578?)	0	
大蔵虎明本狂言集	(1642)	8	
計		321	

このように、中古初期の［用例2］［用例3］『日本霊異記』、［用例4］［用例5］『西大寺本金光明最勝王経平安初期点』、古辞書の［用例6］『新撰字鏡』、［用例7］『和名類聚抄』に表れた「すぐる」は、「り・たり」と共起した用法である。

［用例8］この人々をおきて、又すぐれ**たる**人も、くれ竹の世々にきこえ、かたいとの、よりよりにたえずぞありける。これよりさきの歌をあつめてなむ、万えふしふと、なづけられたりける。（古今集　仮名序　99頁）

［用例9］九、十月もおなじさまにてすぐすめり。世には大嘗会のごけいとてさわぐ。我も人も物みる桟敷とてわたり見れば、御輿のつら近く、つらしとは思へど、めくれておぼゆるに、これかれ、「や、いでなほ人にすぐれ給へ**り**かし。あなあたらし」などもいふめり。聞くにも、いとゞ物のみすべなし。

（蜻蛉日記　中　天禄元年九ー十月　旧207頁　新127頁）

［用例10］「誰れぞ」との給へば、「まろがをぢにて、治部卿なる人の子、兵部少輔、かたちいとよく、鼻いとをかしげなるを、婿どり給へる」との給へば、女君、「ことに人のとりわきてほめぬ所よ」とて、笑ひ給へば、「なかにすぐれてをかしげなる所を聞ゆるぞかし。今見給（ひ）てん」とて、侍（さぶらひ）に出給ひて、少輔のがり文やり給ふ。（落窪物語　132頁）

［用例11］昔落窪といひし時も、衰へずをかしげ也と見しを、今はものものしく、北の方とさへねびて、けはひ殊にすぐれて聞えし君達、著給へる物、こよなく劣りて見ゆ。（落窪物語　197頁）

［用例12］浅茅（あさぢ）、いとをかし。蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。（枕草子　六十六段　105頁）

［用例13］ありがたきもの　舅（しうと）にほめらるる婿。また、姑（しうとめ）に思はるる嫁の君。毛のよく抜（ぬ）くるしろがねの毛抜。主（しゅう）そしらぬ従者（ずさ）。つゆの癖なき。かたち・心・ありさますぐれ、世に経る程、いささかのきずなき。

（枕草子　七十五段　１１０頁）

［用例14］ふと心おとりとかするものは、男も女もことばの文字いやしう遣ひたるこそ、よろづのことよりまさりてわろけれ。ただ文字一つにあやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらん。さるは、かう思ふ人、ことにすぐれてもあらじかし。

（枕草子　百九十五段　２４１頁）

［用例8］『古今和歌集』でも「すぐれたる人」と「たり」と共起した用法で、［用例9］『蜻蛉日記』は「人にすぐれ給へり」と「り」と共起した用法である。［用例10］［用例11］は『落窪物語』の用例であるが、［用例1］同様、「り・たり」と共起していない用法で「すぐれて」となっており、これまでの「り・たり」共起用法とは異なっている。

［用例12］［用例13］［用例14］は、三巻本『枕草子』中の用例で、［用例12］の「能因本」の当該箇所は、「蓮の浮葉のいとらうたげにて」とあり一致していないが、［用例13］［用例14］の対応箇所は「能因本」と一致しており、ここでは確例と見做す。［用例13］は「すぐれ」、［用例14］は「すぐれて」と連用形であり、これらもまた「り・たり」と共起していない用法である。また、後接する動詞は［用例10］［用例11］共に「きこゆ」であり、『枕草子』［用例14］は後接に否定語「あらじ」を伴い、「よい状態である」ことを否定する、現代語の用法と同質のものであると考えられる。

次に、『源氏物語』中の「すぐる」について。「源氏物語」中の「すぐる」の用例数は、〈表Ⅰ〉にも示したが、１２５例であり、出現状況を纏めて示すと下のようになる。

源氏物語　１２５			%
すぐれ（未然形）	4	すぐれず３、すぐれじ１	3.2%
すぐれ（連用形）	１２１		96.8%
すぐれ	6		4.8%
すぐれて	３５		28.0%
すぐれたり	６３		50.4%
すぐれたまへり	１７		13.6%

この他に「ひきすぐる」が1例あり、[用例15]がそれであるが、「すぐる」が複合動詞として用いられた用例は他にない。また、[用例15]では連用形「ひきつれて」で、「なんとかしてこの子をほかの娘よりも抜きんでて面目ある身分に縁づけてやりたいもの」と解釈でき、「り・たり」と共起していない。

[用例15]（略）常にいとつらきものに守をも恨みつつ、いかでひきすぐれて面だたしきほどにしなしても見えにしがなと、明け暮れ、この母君は思ひあつかひける。

（東屋　六　12頁）

[用例16]大宮の容貌ことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人は容貌よきものとのみ目馴れたまへるを、もとよりすぐれざりける御容貌の、ややさだ過ぎたる心地して、痩せ痩せに御髪少ななるなどが、かくそしらはしきなりけり。

（乙女　三　62頁）

[用例17]大臣はこなたに大殿籠りぬ。物語など聞こえたまひて、（源氏）「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意気色などよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。

（螢　三　199頁）

[用例18]御方もいみじく泣きて、（明石の君）「人にすぐれん行く先のこともおぼえずや。（略）」とて、夜もすがらあはれなることどもを言ひつつ明かしたまふ。

（若菜上　四　112頁）

[用例19]（略）（内大臣）「いで、それは、かの大臣の御むすめと思ふばかりのおぼえのいといみじきぞ。人の心みなさこそある世なめれ。必ずさしもすぐれじ。（略）」と言ひおとしたまふ。

（常夏　三　228頁）

[用例20]殿に帰りたまひても、とみにもまどろまれたまはず。また、あひ見るべき方なきを、まして、かの人の思ふらん心の中いかならむと心苦しく思ひやりたまふ。すぐれたることはなけれど、めやすくもてつけてもありつる中の品かな、隈なく見あつめたる人の言ひしことは、げにと思しあはせられけり。

（帚木　一　181頁）

［用例16］は、後接部に否定語を伴った未然形の用例で、花散里の「かたち」（容貌）について「この西の対のお方（花散里）はもともとよくないご器量で」と解釈できる用例である。

［用例17］は、源氏の会話に用いられた用例で、［用例16］と同じく後接部に否定語を伴った未然形の用例である。「兵部卿宮は、だれよりも「こよなし」、即ち優れている」と述べた後、「容貌などは格別なことはありませんが」と解釈でき、ここでも「かたち」（容貌）について述べている。

［用例18］も後接部に否定語を伴った未然形の用例で、「人にすぐれん行く先」とは、『全集』頭注には「入道の夢が正夢であって、若宮が即位し、明石の女御が国母になること」とある。

［用例19］も、打消「じ」に接続した未然形の用例で、「源氏の娘と思うそれだけで大変な評判になるが、（世間の評判どおりには）きっとそれほどにすぐれているというわけでもあるまい」と解釈できる。

［用例20］は、空蝉との逢瀬の名残りを心中で反芻している場面で、「すぐる」は「たり」と共起しているが、「すぐれたることはなし」と、後接部に否定語を伴っており、「とくにすぐれているわけでもない」と解することができる。

［用例1］いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

（桐壺　一　93頁）

［用例21］主の君達、中将をはじめて、七八人うちつれて迎へ入れたてまつる。いづれとなくをかしき容貌どもなれど、なほ人にすぐれて、あざやかにきよらなるものから、なつかしうよしづき恥づかしげなり。

（藤裏葉　三　428頁）

［用例22］尼君、久しくためらひて、（尼君）「君の御徳には、うれしく面だたしきことをも、身にあまりて並びなく思ひはべり。あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそはべりけれ。（略）」と言ひつづけて、いとあはれにうちひそみ

たまふ。

（若菜上　四　１１１頁）

［用例１］は前掲の用例で、「すぐれて」形である。この「すぐれて」は、『源氏物語』「すぐる」の用例中、28％を占めており、「似る」は「似て」が僅か３％であったことを考えると、一大特徴であると考えられる。

［用例21］は夕霧のかたち（容貌）を述べた場面で、「人よりぬきんでて水際だってきれいであるものの、魅力があり、風格があっていかにもりっぱである」と解釈できる用例である。ここで承接している「に」は「比較の基準」を示していると考えられよう。

［用例22］は尼君の会話文中の用例で、「明石の君のおかげでこの身に過ぎてまたとないことと有り難く思っております。しかし、悲しく晴れぬ思いも人並み以上なのでございました。」と解釈できよう。また、ここでは「すぐれてこそはべりけれ」、即ち「すぐれてはべり」となっており、後世の『大蔵虎明本狂言集』に見られた「すぐれて候」と同質のものと考えられる。

［用例23］上達部も、大臣二ところをおきたてまつりては、みな仕うまつりたまふ。舞人は、衛府の次将どもの、容貌きよげに丈だち等しきかぎりを選らせたまふ。この選びに入らぬをば恥に愁へ嘆きたるすき者どもありけり。陪従も、石清水賀茂の臨時の祭などに召す人々の、道々のことにすぐれたるかぎりをととのへさせたまへり。

（若菜下　四　１６１頁）

［用例24］（略）花といはば桜にたとへても、なほ物よりすぐれたるけはひことにものしたまふ。

（若菜下　四　１８４頁）

［用例25］（略）心ばへけはひの埋れたるさまならず、愛敬づきたまへること、はた、人よりすぐれたまへり。

（紅梅　五　３７頁）

［用例26］院、はた、もとより、とり分きてやむごとなく、人よりもすぐれて見たてまつらんと思ししを、この世にはかひなきやうにないたてまつるも飽かず悲しければ、うちしほたれたまふ。

（柏木　四　２９８頁）

［用例23］は「たり」と共起した用例で、『源氏物語』

では、「たり」と共起した用例は全体の50.4%、「すぐる」の半数を占める。ここでは「それぞれの道でとくに秀でた者ばかりをおそろえになっていらっしゃる」と、他と比べて際立っているさまを表す「ことに」が修飾しており、基準よりも勝っていることが強調されている。

［用例24］は「花ならば桜にたとえても、それよりもさらにすぐれた美しいたたずまいは格別でいらっしゃる」と最高の賛辞の場面に「すぐる」が用いられている。ここでも「たり」と共起しているが、「なほものより」と比較の基準「より」と承接している。

［用例25］は「すぐれたまへり」とあり、「り」と共起した用法である。この「すぐれたまへり」は、『源氏物語』中では13.6%を占めているが、ここでは、「人をひきつける情味がおありなところは、誰よりもまさっていらっしゃる」と解釈でき、「人より」と［用例24］同様、比較の基準「より」と承接している。

［用例26］は、「すぐれて」の用例である。ここでは、「誰よりもしあわせになるようにしてあげようとのおぼしめしであったのを」と解釈できるが、［用例24］［用例25］と同じく、「すぐる」は、比較の基準「よりも」と承接している

［用例27］左はなほ数ひとつあるはてに、須磨の巻出で来たるに、中納言の御心騒ぎにけり。あなたにも心して、はての巻は心ことにすぐれたるを選りおきたまへるに、かかるいみじきものの上手の、心の限り思ひ澄まして静かに描きたまへるは、たとふべき方なし。

（絵合　二　377頁）

［用例28］おはします殿近き対を曹司にしつらひなど、みづから御覧じ入れて、若き人も、童下仕まで、すぐれたるを選りととのへ、女の御儀式よりもまばゆくととのへさせたまへり。

（匂宮　五　16頁）

［用例29］殿上の若人どもの中に、物の上手多かるころほひなり。その中にも、すぐれたるを選らせたまひて、この四位侍従、右の歌頭なり。

（竹河　五　89頁）

［用例27］は「たり」と共起した用例で、他と比べて

際立っているさまを表す「ことに」が修飾し、基準よりも勝っていることが強調されている。ここでは「最後の巻にはとくにすぐれているのを選んでお残しになった」と解釈できる。

［用例28］も「たり」と共起した用例で、「冷泉院自身が監督して、若い女房も、それに侍童や下仕えの女まですぐれた者を選びそろえて、女宮の御儀式の場合よりも豪華におととえになられた」と解釈できる。

［用例29］も「たり」と共起した用例で、「その中でも秀でている人をお選ばせになって」と解釈できる。

このように［用例27］は「選りおく」、［用例28］は「選りととのふ」、［用例29］は「選る」と、後接部に「選る」がある点が共通しているものである。「選る」の意は、「複数の中から目的や基準にあったすぐれているものを取り出す」ということであると考えられるが、他と「比較対照」するという点からしても、「すぐる」と「選る」との共通性をそこに見出すことができる。

四、おわりに

以上、中古における「すぐる」の意味用法を調査した結果、次のような結論を得た。

・否定語と共起する用法は、少数である（『源氏物語』で約3％）。

・「すぐる」は未然形、連用形のみであり、形態としては「すぐれ」のみ出現する。

「すぐる」は形態が固定化しており、「不変化動詞」とでもいえるものである。

・「すぐる」と「たり・り」が共起する用法は、『源氏物語』で64％である。

・『源氏物語』で「すぐれて」が「すぐる」の28％を占める。「似て」が「似る」の3％にしか過ぎないこととは対照的である。

・「すぐる」は、「に」「より」「よりも」等、「比較の基準」を示す助詞と共起する用法がある。これは、（基準・対象・目的）に対してまさっている、よい状態であ

る、ということを表すものである。

中古以降の「すぐる」の史的変遷や、「そびゆ」「とむ」等、現代語で「ている」と共起した用例のみしか見られない動詞群については、今後の課題としたい。

（参考文献）

・近藤明（一九八四）「助動詞「り」「たり」の活用形の偏在をめぐって」（「国語学研究」24）
・近藤明（二〇〇三）「助動詞」「リ・タリ」に否定辞が下接する場合（「国語学研究」42）
・工藤真由美（一九九五）「アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―」（ひつじ書房）
・森脇茂秀（二〇〇四）「動詞「似る」の意味用法について―平安初・中期の仮名文を中心に―」（「別府大学国語国文学」46）
・森脇茂秀（二〇〇六）中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について（「語文研究」100・101）
・森脇茂秀（二〇〇七）「静態動詞「似る」の一形式―『源氏物語』の用例を中心に―